

エグゼクティブ・アカデミー・シリーズ  
平成四年七月二十一日

# 最近の中国情勢

東京外国語大学  
教授 中嶋嶺雄

中嶋嶺雄

(株)エグゼクティブ・アカデミー

## 内 容 目 次

|      |                      |    |
|------|----------------------|----|
| I    | 急激に動きだした中国の政治情勢      | 5  |
| II   | 晩年の毛沢東に似てきた鄧小平       | 7  |
| III  | 政治の季節——北京の長い暑い夏      | 10 |
| IV   | 改革・開放政策の矛盾点          | 13 |
| V    | 日一日と進んでいる地方分権        | 16 |
| VI   | 「南風」は防げない            | 20 |
| VII  | 「三つの中国」              | 21 |
| VIII | 警戒を要する中国の新世界戦略       | 23 |
| IX   | 天皇訪中はアジアの国々訪問の第一歩として | 24 |
|      | 質疑応答                 | 30 |

## I 急激に動きだした中国の政治情勢

中国情勢はやはり、中国自身の変化が非常に大きい、あるいは激しいだけに、私どもも時々整理しておかなければいけないと思っています。今年は日中国交二十周年ということで、さまざまな意味で、中国問題を問い返すよい機会だと思います。前回は、二十一世紀の中国的世界はどうなっているかというような私なりの将来構想を、「中華連邦共和国私論」という形で若干お話しさせていただいたわけですが、今日は、もう少し最近のことをいろいろお話ししてみたいと思います。

中国では、ちょうど一月下旬から二月上旬にかけて、鄧小平が、いわゆる南方視察に出掛けた。このあたりから、急激に中国の政治情勢が動いてきました。鄧小平の南方視察は、当初は、彼が深圳の経済特区の遊園地などにいるところを観光客が撮ったという写真が、香港のメディアに載せられるところから広まってきました。普通考えますと、鄧小平は最大の実力者であるのに、彼が北京を離れて地方に行っていることを報道しないことがおかしいではないかと思いますが、それは報じられなかったのです。

ところがそれまで彼の動静を報じなかった北京のメディアも、そこである種のリークというか、そういう設定をしまして、彼が南方に来ていることを報ぜざるをえなくなりました。そして二月の春節の時期、旧正月に鄧小平が上海に行きまして前夜祭に出る。このあたりから中央のメディアが、「鄧小平は今北京を離れて、経済改革・開放という政策のために現地を視察しているのだ」ということが報ぜられていくわけです。

これは中央のメディアが、それまでは鄧小平の動静を伝えなくなかったということです。つまり『人民日報』は、

いま保守派といわれる高狄という社長の統率下にある。最近が高狄も揺れているといわれます。しかしながら、このへんはまだ決着がついていない。そこに南方視察というものの現象面から判断した、一つの重要な問題点が宿されていました。つまり、鄧小平は一生懸命、改革・開放の旗を振ろうとしているのだけれど、それをあえて報じようという。トーンダウンしようとする。そういう勢力が北京には非常に強いということです。

しかしながら、そこまで鄧小平が一生懸命やったわけですから、それがだんだん広がってきまして、三月上旬の党中央政治局拡大会議では、鄧小平の南方視察の時のさまざまな談話を、中共中央二号文件、党中央の秘密文件として党内に流した。これはあちこちでも入手されたわけで、秘密といっても党幹部の間で回覧されているわけですから、日本のメディアも入手して、『月刊 Asahi』その他に二、三翻訳が出ております。要約は新聞にも出ていました。この党中央二号文件の線で政治局が改革・開放の方向に大きく動き出した。

そこに四月上旬の李鵬首相の全国人民代表大会における演説の修正問題であります。どうも李鵬が保守派というか、鄧小平との間に距離があるというところから、政治報告と中国ではいつていますが、日本で言えば政府の施政方針演説であります。その総理の施政方針演説が、百五十数カ所も修正が施されてようやく通過した。これも今までの中国にはなかったことです。もちろん、そのことによって李鵬は大変な面子を失いました。

中国の政治文化を考える際に、従来から非常に問題になることが、「面子」ということなのです。公衆の面前で大変な面子喪失という、まあ、恥をかかされたわけですから、このことはやがて李鵬の含むところに当然なるでしょう。しかしながら、流れは改革・開放の方に行きつつあります。その四月に、全人代という一つのセレモニーがあって今日に至るわけですが、全人代が終わってから依然として中国では改革・開放路線のブレイクアップと、ある意味での鄧小平礼讃の雰囲気が非常に強まっております。日本のメディアは、この間どのように伝えてきたかという

と、文化大革命の頃に比べれば大変落ち着いてきたというか、あの当時は「毛沢東万歳！」「文化大革命万歳！」でしたから、その頃に比べると大変よくなってきていると思いますが、それでも私の感じている感じとは大分違っています。改革・開放路線の全面的勝利、中国ではますます改革・開放の方向が出てくるというニュアンスで伝えています。

## Ⅱ 晩年の毛沢東に似てきた鄧小平

ところが私が分析してみますと、「ちょっと待てよ。なかなかそうはいっていないではないか」というのが現状だと思います。そもそも鄧小平は今年の夏、八月には八十八歳になるわけですが、その高齢をおして、しかも彼は本来、すべての公職を引退しているはずですから、本当是北京でお孫さんとも遊んでいいわけですが、その彼がまさに政治の第一線に降りて行って、旗を振り、彼自ら檄を飛ばし、「改革・開放をやらないのはけしからん！」と大声を張り上げなければいけないというところに、実は鄧小平体制の問題があったと思います。つまり、鄧小平はその波澜万丈の生涯の最晩年に至って、彼の思うようにいなくなってきたというのが、ここ一年ぐらいの中国情勢の真相だと思ふのです。

それを具体的に証明したのが、去年の十一月の終わりの党中央十三期八中全会という、今が十三期ですから、その八回中央委員会総会です。ここでは、農業問題のどうでもいいような決議を一本採択しただけで、中国の改革・開放の将来とか、社会主義の将来とかいうことには全く触れることなく終わってしまったわけです。

去年の十一月というと、ソ連共産党が八月クーデターの後解体して、年末にはあのソ連邦自体が解体するという、

二十世紀の歴史の最大のイベントと思われるようなものが起ころうとしている最中です。その時に共産党の中央委員会が開かれたのに、全くそうした情勢について話すことができなかった。もしそれをやり出したら、侃々諤々、収拾がつかなくなっただろうと思います。ですから、どうでもいいような農業問題の、長ったらしい決議一本しか採択されなかったのです。

そして巷間伝えられた鄧小平の人事構想としては、自分の息の掛かった、将来、江沢民を継ぐのではないかとか、李鵬の後を襲うではないかといわれている前上海市長の朱鎔基、こういう人たちを政治局常務委員にしたかった。できれば常務委員でなくとも、政治局員でいいと考えていたわけですが、それが実現しなかったわけです。つまり鄧小平はあんなに実力があるといわれながら、具体的な人事は、彼の思うに任せなかったということです。

それはどっちかというと、つまり彼が「裸の王様」、あるいは毛沢東の晩年に限りなく近付いてきたからと思われる。毛沢東は物凄い権威を持っていました。誰もが「毛主席」と言って礼讃したわけです。その毛沢東がどうでしょうか、自分の思うように政治が動かせずに、毎日苛立っていたわけです。そして彼は後に、北京では針一本、釘一本刺せなかった。だから上海に脱出して、自分の奥さんが身内で集めていた若い文芸評論家などに、北京の実権派はけしからんと言わせて、それを取り巻く知識人が狼煙を上げたのが文化大革命の開幕でした。私はまさに、それと同じような状況が起こっていたと思います。

ですから鄧小平は、毛沢東が上海に脱出したように、北京ではどうしようもない。マスメディアも報道してくれない。そこで彼は南方視察に出掛けたわけです。これが過去七、八カ月の間の中国情勢です。

きょうの新聞でも、中国は朱鎔基を今後全面に出すという、鄧小平の後継者という形で報じていますが、実はこれはまだ分からないのです。いま名前の出ている朱鎔基とか、あるいは副首相の鄧家華。鄧家華が果たして改革派かど

うかは、まだまだ吟味してみないといけないところがありますが、いずれにしても、今の江沢民は鄧小平としてはあまりお気に入りではない。

この五月に江沢民が日本に来た時に、彼の動静をずっと見ていますと、思い切って自分の意見を言うということはほとんどなかった。PKO問題でも、ここは言っておかなければいけない、あるいは国に帰ると叱られるといわんばかりに、お付きの人のメモを読まされる形で、彼はそれに懸念を表明する。一週間近く日本にいましたが、皆さんにどういう印象を残したでしょうか。彼は天安門事件の後、失脚した趙紫陽氏の後を引き継ぐ形で、急場凌ぎに総書記になったのですが、しかしながらも三年経ったわけです。総書記というのは形の上では最高指導者ですから、三年も経ったらその指導者の個性なり、キャラクターなり、哲学、理念というものが少なくとも表に出てこなければ嘘です。ところが一体、江沢民という人は何を考えているのか。どういうキャラクターなのか。全く表に出てこない。

良いか悪いかは別にしても、その点は鄧小平も、胡耀邦も、非常にキャラクターが表れておりまして。ソ連ではゴルバチョフ、エリツィンとともに一つの個性を持っているわけですが、所詮、江沢民という人は急場しのぎの党官僚、テクノクラート。もともと技術屋なのですが、そういうことではないかという気がしますから、確かに鄧小平としては、自分の後を託するわけにはいかないという評価であろうことはよく分かります。

しかしながら、果たして朱鎔基の方向でスンナリ行くかどうかは、まだ結論が出ないのです。これらの名前の出ている人というのは、現在の党中央のポジションは中央委員、ないしは中央委員候補です。ということは党の序列で数えると、上から一〇〇番、二〇〇番というところに入っているのです。中央委員の一番上は数十番ぐらいのところになりますが、政治局員でもなければ、ましてや政治局常務委員でもないということになりますと、まだまだ帰趨は定かでないと思し上げていいのではないかと思います。

そうしますと結局、この秋の十四回党大会がどうなるかというところに懸かるのではないかと思います。十四回党大会というのは、いま天皇の訪中との関連で、スケジュールがぼつぼつ出始めているますが、十月の終わりぐらいではないかといわれています。私はひょっとすると、もっとズレ込むのではないかと思うのです。今まで中国では党大会が随分ズレ込んだり、何年も開催しなかったりということがありました。

### Ⅲ 政治の季節——北京の長い暑い夏

正に、中国は今年も暑い夏であります。表向きは、北京から割合近いペイタイホウ・北戴河の保養地などに行くのですが、夏というのは政治の季節なのです。胡耀邦が失脚した時も、その夏が大変でした。その前の毛沢東時代もそうなのですが、また長い夏。今年も正に中国の政治の長い夏がやってきた。しかも、鄧小平、陳雲、それぞれ、いわゆる保守派、改革派のリーダーたちにとっては、恐らく最後の暑い夏になるかもしれない。

中国は「八老治国」と、天安門事件以来学生たちは呼んでいまして、八人の老人が政治を支配している。八人の老人が国を治めると、いわゆる“gerontocracy”とわれわれが呼ぶような老人支配体制なのですが、最近、これは逆らえない時の流れとして、次々にその一角から崩れてきております。李先念が亡くなり、この間は鄧穎超が亡くなりました。いずれも保守派というか、非鄧小平系だったと思います。

先程私は「裸の王様」といったのですが、鄧小平は確かにアウトスタンディングなキャラクターと、やり手としての政治力、大変な個性を持っていますが、しかしながら、同時に敵の多い人です。そして今までも重要な場面において、次々に自分が育てた後継者を切り捨ててきました。この間の趙紫陽、その前の胡耀邦、いずれも鄧小平が育てて



きた後継者を、最後の土壇場で切り捨てることによって自分を守ってきたわけです。この事も今はみんな黙っておりませんが、ポスト鄧小平、鄧小平亡き後には、さまざまな問題を投げかけるでしょうし、まず何よりも天安門事件の時の反革命、動乱という鄧小平の行為、「天安門であのようなことをして、何が改革派か」という気持は偽らざる心情であります。

こういう問題があるだけではなく、彼の矛盾したところ、彼自身が能力があるにも拘わらず、次々に辻褄が合わないことをやっていることに對して、やはり潜在的な批判があります。ですから「八老治国」といいますが、八人の長老の中で、本当に鄧小平の同志であるのは誰かということになりますと、文革以来、楊尚昆という人はいつも鄧小平と歩みを共にしているわけですが、楊尚昆しかいないのです。この間亡くなった二人も、李先念は決して鄧小平を讃えたことがない。むしろ、周恩来の後継者であったわけです。鄧穎超は周恩来の未亡人である。彼女は自分の養子である李鵬首相を一生懸命守り立てようとしていた。李先念もどちらかというとそうです。その李鵬首相が、全人代で晒し者になった。これはそう簡単なことでは済まされないと思います。

幸いにして、これらの人は亡くなってきました。あと王震国家副主席、この人は大変な保守派といわれる人で、日本にも時々来たり、中日友好協会の向う側の責任者になったりしました。この王震も保守派です。更に保守派としては宋任窮という古くからの幹部がいます。また薄一波も経済が得意な古参幹部です。胡喬木は中国共産党の三十年史とか、党史の研究者として知られています。最近はこちらと鳴りをひそめておりますが、他に鄧力群、彼は本場の保守派イデオログで、何とかして、陳雲のあと党中央顧問委員会を治めて、自分の配下において、改革・開放というのは保守派にとって社会主義を捨てていくことですから、絶対にそれは許さないということを言い張ろうとしているわけです。これらの人たちは未だに失脚していません。健在です。

そうすると、「八老治国」の中でも二人亡くなりましたが、薄一波とか王震などが残っております。そもそも陳雲を悪く言う人はいません。彼は鄧小平のライバルでありながら、また病弱でありながら、悪く言う人は誰もいない。意外に原則主義者だけれども、身がきれいで、節操が正しい。人柄もいい。大事な時には一言いう。非常に人望があるわけです。さらに北京市長をやって、実権派で、当時は大変な権威を持っていた、一番高齢の九十歳近くになる彭真。彭真もかつては同じ実権派だったのですが、どうも鄧小平とは違うのです。従って長老の間でも鄧小平に味方するのはまあ楊尚昆ぐらい。ところが一般の中国の人たちには鄧小平・楊尚昆というコンビネーションは、「これを聞いただけでも、ガリガリと砂を嚙むような気持だ」という人も多いのです。鄧小平は何といっても、天安門事件の抑圧者というイメージがありますし、楊尚昆も同じです。

そういうことを見ると、党中央の一番の長老のところでも、鄧小平は必ずしも支持を得ているとはいえない。いつてみれば、人望がないという言い過ぎかもしれないのですが、そういう気もするのです。

現職の党中央政治局常務委員会はどうかと見ますと、江沢民、彼は半分は自分が鄧小平に気に入られていないということが分かっていますから、その関係は微妙です。李鵬は面子を失わされたわけです。陳雲の直々の弟子である経済運営に長けた姚依林。それから宋平、この人は地味な人で、経歴を調べてみると組織部とか、あまり表に出ないところをずっと握ってきた人です。彼は今、十四回党大会の代議員をどういうふうに出選し、組織するかという、実質的な十四回大会の組織委員長であります。保守派といわれております。

そうすると、鄧小平にちょっと顔を向けているのが、李瑞環元天津市長。喬石、彼はあまり頼りになりません。しかも、公安関係の元締ですから、そういう自分の出身母体の伝統もあり、どうも本場の改革派とは言い難い。李瑞環という人も改革派とはいえ、宝山製鉄所がいろいろ問題になった時には彼は天津市長になる前で、北京の全人代の代

表でありましたが、国会で、「日本人に騙されるな、日本は再び中国を侵略しようとしているのだ。日本の独占資本はけしからん」ということを言ったわけです。従ってそういうのが果たして何処まで改革派かというのは、非常に「？」であります。そういうことを見ると、現職の政治局常務委員クラスを見ても、全面的に鄧小平を守り立てていこうという雰囲気はないのです。ここに鄧小平が南方視察に出掛けなければいけなかった、大きな原因があったのではないか。

保守派、改革派というふうに、日本の新聞は書いていますが、私は鄧小平対非鄧小平系といった方がいいと思うのです。必ずしも、イデオロギーとか改革・開放ではなくて、やはり鄧小平と、鄧小平は今權威を持っていますが、それについていけないという人がかなりあるのではないかという気がするのです。ここに鄧小平のいわば孤独感があると私は見えています。しかしこれは彼自身が自分で種を蒔いていると言わざるをえない。

彼が生きていてさえ、こういう状況です。ましてや彼が天寿を全うした暁には、果たして鄧小平が中国改革派の旗頭として、いつも彼を崇めるという状況では、とてもいいではないか。むしろ、やがて改革が本当に進めば、当然政治改革にも行かざるをえない。そうすると、「天安門事件は一体何なのだ」「趙紫陽、胡耀邦の失墜は何なのか」ということが当然問われるわけです。そこに、今日の中国の一つの政治的な重大な問題がありはしないかと思えます。

#### IV 改革・開放政策の矛盾

以上、人事を中心とした現状をお話ししましたが、これをもう少し広いパースペクティブで考えてみたいと思います。鄧小平の今やっている改革・開放ということは、かなり本質的な矛盾があります。一方では、深圳の経済特区に

行つて大變變める。まさに中国はこしかないという。だけど、深圳の経済特区が成功しているのは香港があつてこそです。あのすぐ隣りに、活力のある、まさに総てが資本主義の、一番の資本主義的といつてもいいぐらい、いわば金儲け、あるいは流通、金融というもののメッカでありセンターである香港というものがあつてこそ、深圳があんなに発展したことは紛れもない事実です。

だとすれば、鄧小平が本当に改革・開放というのなら、社会主義の計画経済は駄目なのだ、これを捨てなければ、真の改革・開放にはならないというところまで行かなければ嘘です。ところが彼はその点では、絶対に譲れない。片方に保守派があります。ここに鄧小平の大きなジレンマがあります。

鄧小平改革の一つのポイントは農村にあつたわけで、人民公社を廃止したということは確かに鄧小平の功績でしょう。そのために、中国の農村は本当に変わってきました。つまり、人民公社というところどう仕様もないものであつた。表向きはピープルズ・コミュニケーションといわれたけれど、実際には朝から晩まで一生懸命働かされて、人民公社の管理委員会と称する共産党の幹部に収奪されて、そして農民は疲れ果てていたわけです。

鄧小平はこれを止めて、自分で一生懸命丹精込めて畑を耕して作物をつくったら、それを自分で処理して売って、儲けてもいいことをいったわけです。いってみれば、個人農を送り出したわけです。その事によって中国の農村は活気づきまして、万元戸も出てきました。いわゆる郷鎮企業といわれるような小さい田舎の鍛冶屋さんが、創意工夫して、小さい一種の中小企業みたいなものを作っていく。こういうところまで来ることによって、農村は非常に経済が活況を呈したことは事実だと思います。

ただ、中国経済を全体的なシェアで見ますと、いくら農村が活況を呈しても、それは国家の財源にはならないのです。みんな鳥小屋を直したり、自分の家を直したり、そしてここ数年、中国の農村は急速に電気製品を買い込んだり、

テレビを買ったり、冷蔵庫を入れたりして、儲けた分は全部それで処理してしまうわけです。問題は何といっても国営企業なのです。税収の六〇％近くは国営企業でして、まさにここが問題なのですが、国営企業は大変な赤字であります。「親方五星紅旗」とよく言われるように、いわば国営企業ですから、福祉から学校、病院など全部抱え込んでやっている。大型になればなるほどそうです。そのことによって物凄い赤字が累積する。いくら働いても賃金は同じですから、サボタージュが起こる。さばっても、ある一定の補償がある。まさに社会主義の悪い面が全面的に出てくるわけです。

しかし、国家財政を支えているのは、まさにこの国営企業なのです。農民からの財源はほとんど無いわけです。そうしますと、国営企業に対して根本的に手を付けようというところまで行けばいいけれど、これは鄧小平としても手が付けられない。ここにも大きなジレンマがあります。

三番目の大きいジレンマは、むしろここが重要なのですが、彼は改革・開放といいながら、あくまでもこれは経済建設に限ることなのです。政治面、つまり民主化ということは断固許さない。この本質的な矛盾をどういうふうに説明できるのかというと、何の説明もしていない。だからこそ、右手に改革・開放を言いながら、左手で天安門事件を起こしているわけです。

しかも、彼の今回の南方行脚でも、日本のマスメディアは改革・開放の部分だけを報道しすぎるのですが、彼は他方では何を言っているのか。「ブルジョア自由化は絶対許さない」とも言っております。そもそも中国は二つの足で立っている。改革・開放を一つの足、もう一つは四つの基本原則であります。四つの基本原則とは何かというと、社会主義の道、共産党の指導、人民民主主義独裁、これはプロレタリア独裁と言い替えてもいい、そしてマルクス・レーニン主義と毛沢東思想というわけです。つまり中国はまさに矛盾しているわけで、楯の裏と表を、ある意味では使

い分けているし、それを鄧小平といえども絶対に捨てようとは思いません。確かに共産党の支配下でそれは出来ないとしても、例えばゴルバチョフやエリツィンとも随分違います。あるいは趙紫陽、胡耀邦はどちらかというと民主化を求めたわけですから、そういう立場とも根本的に違うものであります。

## V 日一日と進んでいる地方分権

もう一つ、問題点を挙げるとすれば、鄧小平は広東に行つて、大いに広東の経済特区を褒め讃えた。あるいは「広東省もよくやっている」と言った。上海に行つて、浦東経済開発、上海の黄浦江以東あたりを一生懸命やろうというのは、大変結構だというのですが、しかし上海といい、広東といい、北京の指導によつてうまくいっているわけではないのです。広東はまさに、香港とリンクしたということです。

広東省の省長であつた葉劍英の長男の葉選平、彼は北京のいうことを聞かずに、税収の九〇％を全部広東で留保してしまつて、それをいわば公共投資に廻したわけです。そしてデルタ地帯に橋を架け、たくさん渡し船を渡したりした。そのことによって、あのデルタ地帯はものすごく良くなった。しかも、それを完全に香港とリンクさせた。そのことによって彼は実質的に解任されたわけです。しかしこの様にしてある種の地方分権が、日一日と進んでいるといつていいでしょう。

最近の一番新しい例をお話ししますと、台湾から今、年間約一〇〇万人が大陸に行っています。これは大変な数です。天安門事件以来三年、三〇〇万人が大陸に行っているわけです。その大部分は、彼らの故郷である福建省へ行っている。福建省といえば、何といつても廈門、ここは昔からの商業港であるし、いま中国では経済特区です。今後深

圳の次に、あるいは深圳以上に、厦門が注目されると私は思います。そして厦門は台湾ブームで大変なものです。

ここでは最近面白い現象がありました。本当は台北と厦門との間を飛行機が飛べればいいのですが現在ではそれができない。ローカル航空である厦門航空というのがありまして、何とか台北、厦門間を飛ばしたいと一生懸命やっているわけです。本当なら中国は民航で台湾は中華航空となっておりませんが、ここが無理ならば、厦門航空と、例えば最近台湾でいろいろ注目されているエバー航空でもいい。コンテナで有名なエバー・グリーンです。いずれ、そういうことになるかもしれません。しかし、当面はそれは出来ないものだから、マニラ経由で厦門に行く飛行機があるのです。これは台湾のお客さんで一杯であります。普通、台湾から中国に行く人たちは、香港でビザを取って大陸に入っていくわけです。ビザもだいたい一時間ぐらいで取れるようになっております。ところがあんまり多く行くわけです。そういう状況の中で香港を経由して行くと、香港から厦門まで行くのにまたかかりますし、不便です。それよりもマニラまで行って、すぐそのまま厦門に到着する方がよい。

しかも、台北・マニラは最近密接な関係になっていますし、今度の新しいフィリピン大統領も、台北に行って「ぜひお願いします」と。大陸は頼りにならないわけで、すぐバシー海峡を隔てて台湾と近いし、何といっても台湾の人たちは、フィリピンとは昔からいろいろ関係を結んでいます。そうするとビザはどうするか。福建省は着いた人に、「ここでビザを出しましょう」というふうにし始めました。これに対して北京は、「けしからん」というのですが、福建省は言うことを聞かないのです。「われわれがここに来たお客さんにビザを出していいのだ」という形になっていまして、これなども、ある意味では党中央のコントロールというか、中央が保守派と改革派でこうなっている時に、むしろ広東省、福建省の現場は、どんどん現実路線の方向に行っているということだと思ふのです。

ここに、ある意味では中国の未来の姿。私が申し上げた、中華連邦共和国に行くまでの一つの過渡期の姿があるか

もしません。こういう状況が今、中国ではどんな進行しているかと思っています。

そこで、中国と日本との関係の中で、中国は最近、外資の導入をどんどんしたいと言っております。鄧小平いわく、「三資企業、大いに結構である」と。三資というのは、まず合弁企業、これは四九対五一とか、五〇対五〇とか、いろいろな比率がありますが、この合弁企業は大変結構である。また合作企業というのがあります。経済協力型の企業です。一〇〇％合弁までは行かないけれど、合作企業がある。それから一〇〇％外国資本の企業というのがあります。これを独資といいます。それでもいいから、どんどん中国に来てくれということを言っているわけです。

なぜならば、これらの外国資本は中国の労働者を雇ってくれる。そして彼らに賃金を払ってくれる。その上税金も納めてくれる。しかも、そこで出来た製品はだいたい水際作戦ですから、中国の中で売ることを中国はあまり欲しないが、それを外に持っていくて売ってくれる。つまり外貨を稼いでくれる。こういうところから、非常にそういうものを歓迎しているわけです。歓迎しているということは逆に中国にとってメリットがあるということです。それから、その分、日本側は余程キチンと肚を引き締めていかなければ、いけないことになりはしないかという気がします。

私はたまたま、五月に大連の経済技術開発区を見してきました。大連は街の中はほとんどそのままです。特にいま中山広場といわれる大広場の周りは、昔懐かしいヤマト・ホテルがいまは大連賓館となっております。横浜正金銀行大連支店は、そのまま中国銀行大連分行とか、旧満鉄の本社の建物とかがそのままあるわけです。そこから少し離れた所に、経済技術開発区をつくってまして、私の見た限りでは、深圳の経済特区が出来て暫くの状況とちょっと似ています。まだまだなのですが、ここは大連ということもあり、大分日本の企業もあります。深圳は何といっても香港、あるいは台湾経由の華僑資本とか香港資本とかですが、大連の場合は日本企業がどんどん出ているわけです。

大きいものでは、マブチ・モーターズは数千人の雇用を向うでやっていますし、最近はやノンが出て、一〇〇％



日本の出資であります。工場も見てきましたが、こういう所を見ますと、なるほどと思います。ある意味では大変よくやっているし、成績も上がっているわけです。しかし恐らく日本では考えられないような単純労働、つまり労働集約型というか、単純労働をやらせているわけで、大きな所に同じ制服の人たちが、ちょうど愛知県などの鳥小屋を見る感じで、ちょっとゾツとしたのですが、こういう感じの、今の日本ではとても考えられないような形の単純労働をやる。

賃金を比べて見ると、だいたい国営企業よりも高い賃金をもちろん払っているわけです。国営企業の三倍ぐらいは払っている。それにしても、日本と比べるとまだまだ数分の一とか、十分の一です。モーターの部品が流れてくるのを、単純にちょっと手を加えていけばいいわけですから、そういうものでは中国でもやれる。そういうような部門については、確かに中国はまだまだ可能性があると思います。

ただ、問題はその場合、だんだん中国側が賢くなってきましたから、労働者も、例えばAという企業が一月一〇〇〇元くれた。そこまでは出してないようですが、それにしても、日本円にしては一〇〇〇元はしれたものですが、仮りに出すとすると他の安いところからその差によってどんどん労働者は渡り歩くということになってきます。ですからこれもほどほどにしておかないと結局、何のために中国に出て行ったのか。やはり賃金が安い、比較的良質な労働力が確保できるということが、日本の企業の出いき方によっては、逆に自分の手足を縛ってしまうということも、間もなく出てくるのではないかと感じたわけです。

そういう状況ですが、いずれにしても、仮に大連がそういう形でだんだん開発されていくとすると、果たして日本が中国に対してどういう形でコミットするかという問題があります。これを見ても、やはり中国は北京だけではないという方向がどんどん出て来るのではないかと思います。

## VI 「南風」は防げない

私を見ると、中国は結局、改革・開放ということを全面に出せば出すほど、実質的には脱社会主義に向かいつつある。もう社会主義というのは万里の長城の南にしかないわけですから。しかも、何とか鄧小平たちが頑張っているが保守派の人たちも基盤がまだ強い。先程申しましたように保守派というのは一人ひとりの人材をとると、鄧小平とか、趙紫陽とか、胡耀邦とかのような、そんな遺手な人はいないのですが、しかし総体としてみるとなかなか保守派の力は侮り難いのです。ですから、ここはもう一度よく見ないといけない。

仮に改革派が今後出てきても、ソ連や東欧の影響は何とか防止出来るでしょう。それには現に、ソ連も東欧も社会主義のタガが緩んで、共産党が無くなった。あるいは市場経済を導入してもうまくいかない。当面は混乱するでしょう。それは当然のことだと思えます。長い間社会主義で、しかも、ソ連はついこの間まで、世界で一番立派な国であるかのように自ら宣伝し、非常に傲慢な態度をとり続けてきたわけですがそれが実際には駄目になって、今一ルーブル一円で、本当に一〇〇分の一ぐらいになって、紙屑みたいになった。ソ連はどう仕様もなくなって、それで急に市場経済だといっても、そうは問屋が卸さないと思うのです。

長い間、ソ連があれだけ軍拡をやり世界を脅かした。その代償は当面、もちろん西側の援助ということもあるかもしれないませんが、自ら支払っていかねばいけない。その過渡期のプロセスでは民族紛争もありますし、さまざまな問題も出てきた。ソ連も、東欧も、逆に何となく共産党独裁体制の方が良かったという人もいるぐらいな風景を見えていますので、それは中国は何とか凌いでいけると思うのです。

従ってソ連、東欧の影響というのは当面凌げるでしょう。そこには万里の長城があるわけです。しかし、南から吹いて来る風、「南風」、香港、台湾の影響は、改革・開放を唱えれば唱えるほど、あるいは、もし日本が今後大連あたりを拠点にどんどん出て行くとすれば、西側諸国の市場経済の原理がどんどん大陸を、日一日、刻一刻と変化させてくると思うのです。

ですからこちらの方が早いのではないか。現に広東省あたりは、「赤い中国から白い中国」になってきているわけです。そしてだんだん、丹頂ヅルの頂点が北京だけしかないという状況から、それもやがて消えていくだろう。一挙に崩れないにしても、そういう形で中国は崩れて行きつつあるのではないかと、私は見ます。そうすると、今の中国の指導者が言っているような路線、すなわち保守派、改革派を問わずそれが社会の現実と整合性を保ち得ないということになり、やがて中国共産党も解体という方向に、恐らくここ十年ぐらいのタイムスパンで取ると、行くのではないかと見ております。あるいはもっと早いかもしれません。あるいは若干遅くても、このまま二十一世紀まで持ち堪えるとは思えないのです。

## VII 「三つの中国」

そうなりますと私どもが中国問題を見る時に、今までは中国というと中華人民共和国一つだったのですが、小さいながらも台湾の存在は無視できない。あるいは香港の経済活力は無視できないと思います。むしろ、私は最近「三つの中国」ということを言っております。

三つの中国を見る場合、大陸は人口も面積もものすごく大きくて、香港はケシ粒のような存在で、台湾はコメ粒の

ような存在だとしても、これからは経済の時代です。経済の規模から見ると例えば貿易総額からすれば、一番多いのは香港、その次が台湾。それから大陸という順序になるわけです。外貨準備高では台湾がトップで、その次が大陸、そして香港という順序になります。しかし、どうしても大陸の方は十二億人、あるいは十三億人に垂々とする人口を持つわけで、これに対して、香港は大口に見ても六〇〇万人、台湾は二〇〇〇万人ということになりますが、この小さなコメ粒ないしはケシ粒の存在は、決して無視できません。

現にアジアでは、どれだけ物やカネが動いているかという点、むしろ後者の方が動いているわけです。香港の貿易総額は約二〇〇〇億米ドル、台湾は一四〇〇億米ドル、大陸の中華人民共和国は一三〇〇億米ドル。香港の貿易総額の最近伸びている一番の大きな原因は、台湾からの香港への輸出が急増していることです。計算上は二五%以下の付加価値しか付かない場合には、再輸出品目になりますから、これはほとんどそのまま大陸に全部行っている。

もう最近の大陸における台湾製品の氾濫、これは凄いです。オートバイはホンダと台湾も初めは提携していました。が、いまは完全に台湾の企業がホンダから指導を受けたものを、自分のところでどんどん大陸に売っているわけです。こういう状況がますます出て来るだろうと思います。ですから、そういう意味でも正味を取ると、台湾の存在はものすごく大きい。

外貨準備を最近、香港が初めて二百二十〜三十億米ドルと発表しました。大陸はこのところ外貨準備が非常に好転してきました、一時天安門事件の後には、正味百数十億米ドルもなかった。あるいは一〇〇億米ドルを切ったわけですが、このところ四〇〇億米ドルぐらいになっています。これは中国がものすごく輸出ドライブをかけているからで、これも今後の摩擦の原因になるでしょう。今でも、ものすごくプレッシャーをかけているわけです。

## VII 警戒を要する中国の新世界戦略

私は大陸の外貨準備が良くなった一つの原因に、武器輸出があると思います。これは統計上なかなか出てきませんが、人民解放軍の中に賀龍將軍の息子という、賀鵬飛が人民解放軍の装備部長のようなことをやっております、これが武器輸出の元締だそうです。武器は大分輸入もしています。逆に輸出もしています。これは今後の日本にとっても非常に警戒しなければいけないというか、キチンと抑えるところは抑えておかないといけないと思います。

原子炉の問題もあります。ソ連のチェリノブイリだけが問題ではない。中国の原子炉の問題も重視しなければいけない。こういうところで一種の武器輸出が死の商人になっているわけですが、それで一生懸命外貨を貯めようとしているわけです。これは結局、中国の最近の世界認識が、特に湾岸戦争後、しかもソ連は駄目になったというところから、アメリカの単独覇権に対する警戒心が非常に高いということです。中国というのはどうしても自分中心にもを見る、一種の中華思想がまだまだ抜けていないわけです。

こういうことからすると、かつて戦後の冷戦体制が続いていた頃は、世界は米ソの対立という問題がありましたから、その対立がある限り、中国というのはソ連にとってもアメリカにとっても、非常に重要なカードだったわけですね。いわゆるチャイナ・カードであります。ソ連にとっても、中国がアメリカと接近することは非常に困るという問題もあって、中国を高く売りつけることが出来ておりました。

ところが、今やソ連自身が無くなってしまったわけです。アメリカもソ連も軍拡競争に限界が来て、そして日本やアジアNIEESなどが非常に成功して、軽武装、経済大国化していることに対する脅威というのは米ソにあったと思

うのです。またレーガンの軍拡以来、レーガノミックスはうまくいかなかったという問題もありますし、ソ連はゴルバチョフのペレストロイカやグラスノスチをやったところが、あるいは新思考外交をやったところが、それが対外的には人気があっても、国内はガタガタになったという問題もあって、そしてマルタ会談になり、そしてタガが緩んでいく。その中で一挙に、内部からソ連や東欧は崩れていくという問題がありました。

ところが中国から見ると、こういうところを公平に見ることが出来ない。もしも、公平に直視しようとするれば、中国の社会主義自身があるすぐく危機に直面していることが分るわけですから。それをそうではなくて、ソ連が崩壊し、アメリカが単独で勝ったのだ。そのアメリカは湾岸戦争で見せつけたように、優秀なハイテク兵器によって、一方的にイラクをやっつけてしまった。まさに世界は、アメリカの単独覇権になったという認識が非常に出てきているわけです。こういう認識の中で、最近の中国は日本に対してもPKOの問題に見られるように、「軍事大国は困る。しかしながら、政治大国は結構です」ということを言い始めている。これは日本に対するある種の誘いなのです。この点をわれわれは十分考えておく必要があると思うのです。

いってみれば、今中国は、日本を一生懸命自分の土俵に誘い込んで、日米関係の離反を狙っているのではないか。天皇訪中という問題も間も無く政府の決断が出るようですが、そのへんの問題を十分考えた上で、この問題を善処していかなければいけないのではないかと、私は思っています。

#### IX 天皇訪中はアジアの国々訪問の第一歩として

最後に若干、天皇訪中の問題にふれて、締め括ろうと思います。天皇訪中問題は私が知っている限り、一研究者の

立場から申しますと、まだ政府の決断は出ていないと思いますが、しかしやはり出る方向に行くだろうと思います。宮沢さん自身はああいうタイプの指導者ですし、天皇訪中問題に関しては、外から見ていて優柔不断のように見えるが、それなりに考えていらっしゃるわけです。でも新聞などでは、宮沢さんもだんだん前向きに世論が熟するのを待つという考え方であると言っている。自民党の中は、この問題では非常に反対の人が超派閥的に多かった。これもよく分かりますが、だんだんそのへんが一種の根回しとかいう、世論づくりというものによって、訪中という方向に固まってくるでしょう。

時期的に見ると、確かに十月下旬から、十一月の一日か二日にかけてぐらいいしかなないとすれば、これが実現するとなると、間も無く決断せざるをえないと思います。外交当局はもう少し早く決断してほしかったようですが、当面はPKO問題とか、宮沢さんの訪米とか、ミュンヘン・サミットがありました。今やPKO問題もサミットも終わり、参議院選挙です。参議院選挙が二十七日に投票で、これも、つまり自民党の敗北ということになりますと、恐らく天皇訪中も難しくなると思いますが、どうも選挙で、自民党が大敗ということは無さそうであるということになると、参議院選挙明け、八月の初旬ぐらいがギリギリのところですから、このへんで一つの方向が出ると思います。

この問題を見ていますと、我国には、サンケイ新聞に全面広告を出したような知識人の方々、黛敏郎さんをはじめ、どちらかというと皇室や天皇制に対して大事にという立場の人たち、あるいはちょっと語弊があるとすれば、ナシヨナリストとっていいかもしれません、そういう人たちが、非常に反対の運動をされているわけです。サンケイ新聞の正論欄でも、いろんな知識人が賛否両論を戦わせておりました。他方で日本共産党なども当然反対です。

これらの、どちらかというと保守派の知識人と、どちらかというと左翼というか、革新というか、そういう知識人たちと話を交えてみると、奇妙なことに、また面白いことには、全く論点が一致しているのです。天皇の政治利用と

いうことで共産党は反対である。どっちかという保守派という人たちも、天皇の政治利用ということで反対である。そういうふうはこの問題で、PKOの問題でも意見が分れましたが、つまり左右両極が完全に同じ論理で反対という現象は、戦後日本の政治史でも珍しいことだと思います。

しかも反対の理由は、まず第一に天皇の政治的リードである。若干のニュアンスに違いがあるとすれば、ナシヨナリストたちの言うのは、「いつも中国に対していわば謝罪外交、土下座外交を繰り返しておいて、今それらの尻拭いを天皇に訪中でやらせようとするのはけしからん。政治的利用である」と。一方では「天安門事件を抑圧した反人民的な中国共産党と、PKOをやった日本の政府自民党が癒着して、天皇を政治利用する」というのが共産党などの言い分です。その若干の違いはあるけれど、言っていることは非常に同じである。中身も双方とも、「中国は不安定である。あるいは政治的にも対立がある。そういう状況の中に天皇が行くことはないか」という議論だと思います。

私はこれまで、この問題で発言を求められたけれど、控えてきました。なぜかという、天皇の訪中という問題をめぐって、国論が真っ二つに割れて、侃々諤々やるという事態は避けなければいけないというふうに思っていました。それが私のプリンスブルだったのですが、ここまで来たものですから、ついこの前、毎日新聞にちょっと書かせていただきました。あるいは最後のところは私の意見ですので、お叱りを受けるかもしれませんが。

そこで私が言ったことは、一つには政府自民党が今までにコミットして来ていることです。渡辺さんが一月に行った。江沢民が来た時に、天皇にも直接直訴もしたし、宮沢さんもそれに対して前向きな姿勢を示した。こうなりますと、恐らく天皇訪中は決めるのではないかと思うのです。もし、これを蹴ると大変な問題、つまり日中関係が困るということで、外務当局は一生懸命努力しています。そうなるならば、天皇が訪中した時に、こういう問題をわれわれは



外務当局なり、世論としてもキチンと問題点を詰めておくべきかというところに、議論は行かざるをえないのではないかと思います。

一つは、如何なる意味でも政治利用にというのは、左右両方の反対のみならず、皇室外交そのものが、やはり日本の新しい体質の中ではあってはいけないわけですから、飽くまでも友好親善に徹していただかなければいけない。これは当然だと思います。ここはコンセンサスが大方得られるでしょう。

もう一つは、むしろ中国に行かれるとするならば、次にはもっとアジアの国々にも行かれるように、そういう外交努力をすることによって、開かれたアジアをつくっていく必要がある。今アジアには、ヨーロッパと違って物凄い政治の壁があります。台湾と北京との間があんなに流通、交通しているのに、日本政府当局はこの問題では、あまりにも北京の意向を気にしすぎる。

むしろ、日本にとって経済の上でも大事なものは台湾です。そして最も日本の皇室や天皇に対して親近感を抱いている所は、世界で何処かと言えば、それは台湾なのです。台湾の人たちはわれわれ以上に、皇室に対する尊敬の念を持っています。それは国民党の中国が来たということもありますが、天皇がすぐには行かれないにしても、台湾に皇族が行かれるとかすべきである。私は台湾に天皇が行く日が来ていいではないかと思ひます。あるいは時期が熟せば韓国にも、場合によれば北朝鮮にも行かれるような、開かれたアジアをつくっていくという条件でならば、天皇訪中ということも、この際考えざるを得ないのではないか。

それを中国の条件を鵜呑みにするような形で、中国外交のベースに巻き込まれるような形で、日本の天皇の訪中が、あつては絶対に困るということです。そこはキチンとしておかなければいけない。ましてや中国は朝貢外交の国です。依然として中華思想が残っている。「ついに日本も貢物を持って、我が中華帝国に跪きに来たではないか」というふ

うに中国に感じさせるような態度は、絶対にとるべきではない。恐らく多くの国民が、今の天皇訪中をめぐる左右両極の対立の中で、ある意味ではとまどい、消極的ながら、まあまあというふうに感じたりしていると思うのですが、それは一つには、日本の政府当局の、この間の二十年間の日中外交のやり方にも責任があったと思うのです。

私自身、中国研究者として見て、その節目節目での日本の政府の対中国政策にはかなり抵抗がありましたし、わだかまりがありました。最近の例で見ても、いわゆる第一に教科書問題。これでは、日本はいわば政治決着をしたわけです。それから靖国神社の中曽根さんの参拝を契機とした、いわゆる靖国問題。こういう問題はまさに日本の内政問題ですから、それを中国にとにかく言われることはない筈です。そして第二次教科書問題が起り、藤尾発言が起りました。藤尾さんの言論をすべて私は支持するつもりはないのですが、しかしながら、藤尾さんに対する賛否があっても、これは日本の問題です。それも政治決着になったのです。そして新編日本史をめぐる第三次というか、再び教科書問題が起り、A級裁判の問題が起りました。

こういう日本の精神的な根幹なり、日本のいわば理念の根本に触れるような問題で、常に中国は何か中国なりの立場から発言し、それに対して日本の外交当局は、彼ら自身に言わせると、「決してそんなことはない。われわれもちゃんと言うべきことを言っている」というけれど、結果的には中国に対する「対中位負け外交」、いつも日本は譲歩してきたという、あるいは「贖罪外交」だったと思うのです。

その事が、日中関係というものを二十年間見てきても、国民の間に納得させえないものがあつたのではないか。これが今回の天皇訪中をめぐるモヤモヤではないかと思うのです。「どうか天皇。行ってきてください」という気持ちになかなかなれないというところは、日本外交にも責任があつたのではないかと思ひます。

日本と台湾のことからすれば、あまりにも非対称的に台湾を切ってしまった。しかしながら、世界の奇蹟で、今ど

んどん閣僚も台湾に行くようになったのですから、外務当局はその点で少し、北京の意向だけを気にしすぎたという問題もあろうかと思えます。

そして何よりも、日本はやはり西側の一環ですから、いわば中国ベースに寄り添った一種のアジア主義に陥ることは、厳に慎むべきではないか。日本はアジアの一員ですし、日本を取り巻くNIEESは日本をテコにして動いているわけですし、好むと好まざるとに拘わらず、中国経済も日本に依存せざるをえない。そういう意味で、日本はアジアの中で大きな存在であるだけに、そこで日本は自由とか、民主主義とか、いわゆる人種とか、市場経済の原理とか、自由貿易とかにおいては、やはり戦後の日本あるいは明治維新以来の成り立ちからみてある意味ではいわば不偏主義であらねばならない。

そういうユニバーサリズム、グローバリズムの立場は絶対に明らかにしておかないと、あの人権抑圧をやった中国とベッタリ癒着して日本が天皇訪中まで実現したというふうに外国にとられるわけですし、それは非常に今後の長期的展望の中で、日本に対するイメージを悪くすると思います。とにかく西側諸国は、今の中国については触れたくないというぐらいに、やはりイメージが良くないのです。李鵬首相が行っても、ブッシュは握手をしない。銭其琛外相が行っても、西側の指導者は次々にろくな会見もしてくれなかった。やはり天安門事件というのは程度の問題であって、ただ上から抑えられただけの座っていたデモ隊を銃撃したわけで、それで居直っているわけですから、こういうことは現代の世界にあってはいけないことであって、そのことの代価を中国自身が支払っていないといけない。

日本はそういうことははっきり表明していく中で、初めて天皇の訪中ということがあっていいということになるわけで、それにはさまざまな条件が必要ではないかということを、最後に申し上げまして本日のお話を終わらせていただきます。この一番最後の問題は議論し出すと、皆さんも賛否両論いろいろあると思いますが、今日はざっくりばらん

に、私なりの見解を述べさせていただきました。

質 疑 応 答

○ アメリカとか日本、ヨーロッパあたりに逃げている中国人の中に、かなり優秀な人がいるという話もあります。が、そのへんが中国の次の指導者として一つの力になりうるのかどうか。つまり今の中国の中には、本当の後継者はいないのだという人は言っているわけです。そのへんはどうお考えですか。

中嶋 非常に重要な問題だと思います。やはり、ああいう形で天安門事件が起こり、政治亡命をする。亡命した人たちが、外で中国の民主化運動をやるということが如何に難しいかということなのです。それぞれ個々に見れば非常に優秀な人がいます。例えば私が注目する人では、趙紫陽のブレーンでもあった嚴家其です。私もパリで会ったことがあります。彼は四十代で、政治学者としては非常に鋭いものを持っています。彼などは今でもかなり支持者がいますし尊敬も受けていますが、ただ彼は学者ですから、政治そのものをやるというところまで行くかどうかは疑問です。その他に方励之がいましたが、彼は中国のサハロフと言われるのですが、果たして政治的にはどうか。

今中国では、実はほとんど良い人材が外に出ているわけです。作家とか、哲学者とか、非常に多い。ただ、それらの人たちが一つの政治運動として、しかも国内と連帯して出来るかというところは難しいでしょう。中国の公安当局、国家安全部というものの網の目は物凄いです。日本の留学生も全部監視されています。日中友好といって、天皇をお呼びしたいといいながら、どうして天安門のところ、TBSのカメラマンにああいうことをやるのか。ああいうこ

とをやれば日本人はみな何だと思うわけです。

これは恐らく外交部とか、鄧小平でもコントロールが効かない国家安全部という、もう一つの中国の社会主義、共産党支配体制の国の、一つの物凄い国家装置があるのです。そこを皆は見えていないから、問題になると思うのです。

ですから民主化運動の取り扱いとか、摘発とか、そういうことは国家安全部で、これは外交部などは足許にも及ばないと思うのです。これは鄧小平も、ひょっとすると歯が立たないような組織だと思います。その部分がやはり、長い間の共産党体制の中には出来ていますから。国家安全部自身が出来たのは割合に最近ですが、いつてみれば秘密警察、公安警察です。この部分がやはりやらせていると思うのです。

そういう壁があって、外の世界の民主化運動と国内とは、絶対に連結させないのだという状況の中で、外の世界の指導者たちが今すぐに、そういう形の中国の次の世代の指導者になるという可能性は、実はなかなか少ないと思います。

ただ、問題はやがて中国国内が崩れていくだろう。ゴルバチョフだって、エリツィンだって、ついこの間までパリの共産党員だったわけです。中国国内だって、趙紫陽、胡耀邦はまさに共産党の総書記であつたけれど、自分たちで民主化運動を展開したわけです。そういう形での変化をしていった暁には、彼らもかなりの地位を占めるのではない。当面、中国の政治のシーンで、今度の大会でどうでしょう。趙紫陽の復活ということですが、改革・開放が本当にそこまで行くならば、当然趙紫陽を復活させないといけない。趙紫陽を復活させるということになると、天安門事件は何だったということになるわけで、だから今の中国は改革・開放といつても、趙紫陽復活というところまで鄧小平は行きたくないのではない。これをやると、次のステップとして自分のところに責任が及んできますから。そういう状況だと思います。

○ 先生がおっしゃった福建にしても、広東にしても、だんだん中央のことを聞かなくなる。地方に一つのリーダーが出て来るとー。

中嶋 それは面白いですね。その可能性はあると思います。

○ それは海外の優秀な人材を吸収してということがありうるような気がしますね。

中嶋 まさに広東の葉選平はそれで、いわば実質的に解任された。彼は香港の赤い総督といわれた新華社香港分社の許家屯と親しかったのです。許家屯は香港では泣く子も黙るといわれた。香港返還がだんだん決りかけた頃、中国から落下傘で降ろされた人です。新華社香港分社というのは香港の陰の赤い総督府であった。その彼がアメリカに亡命したわけですから、そのへんと結びついていて、こういう人たちが将来どうなるかということもありうる。

○ 天安門事件の時に柴玲という女性が逃げて来て、今アメリカにいますが、あの人はフランスに行くまでの間、暫く地下に潜っていたと聞いたことがあります。国家安全部のようなものがある反面、やはり柴玲に対するシンパといえますか、そういう動きはー。

中嶋 まさにそこが問題なのです。ウアルカイシ君が逃げたでしょう。彼はウイグル族ですから、顔が非常に特徴的だったです。柴玲女史は変装したらしいのですが、それはみな香港、マカオを経由して逃げています。そこには大きな地下水脈があると思います。実は許家屯が亡命せざるをえなかったのは、香港で彼らの保護をしたではないかという嫌疑がかけられたのです。恐らくそれには、葉選平あたりも絡んでいたのではないかと思います。そうでなければとても逃げられない。あれだけ大量の人たちが、あの嚴重な警戒を掻い潜って、ほとんどが香港、マカオから逃げているわけです。

○ いま一橋大学を出て、金沢大学の助教授になっておられる中国の人はなかなかしっかりしている人ですが、金

その頑張れたのは、この逆境の中で台湾の人たちが一生懸命やったということも評価しなければいけない。まさに、いま台湾の奇蹟に注目しているわけですが、同時にやはり日本の過去の遺産というのが、非常に大きく台湾の経済発展に役立ったのではないかと思います。

○ 『文芸春秋』に伊藤憲一さんが、韓国が日本に対して、怨恨とか恨みとかを宣伝しているのは、国内の統一の手段であると書いておられます。

中嶋 私はそういうのは否定できないと思います。一つは、過去の日本の、一八九五年以来の、韓国に対する統治の仕方にも問題があったかもしれませんが、もう一つは戦後の朝鮮戦争だと思ふのです。それによって日本は受益者だったのです。ところがあの時に韓国の人たちが血を流したというのは、やはり大きいのではないのでしょうか。

(平成四年七月二十一日講演)

(文責 堀エグゼクティブ・アカデミー)

発行日 平成四年九月三日

発行人 新 井 俊 三

発行所 ㈱ エグゼクティブ・アカデミ

㈱ 国際関係基礎研究所

〒一〇六

港区南麻布一―五―一四―六〇七号

電話 (〇三) 三四五二―二七